HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	経済学史における理論と歴史
Author(s)	石垣, 博美
Citation	北海道大學　經濟學研究, 12(2), 31-50
Issue Date	1963
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31089
Type	departmental bulletin paper
File Information	12(2)_P31-50.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学史における理論と歴史

石　垣　博　美

1

まえにわたしは，マルクスの経済学体系の初期における構想を，若干の側面から考察したことがある。「生産一般」，「原始的蓄積」，「物神性」などの項目を，そのさい取り扱った。これらは，「資本論」の理論展開上ですら，むしろ議論の本筋からははなれたものであるが，それだけに，経済学の方法的見地をみるばあいの，逸すべからざる参考材料になるとおもう。そこに敍述されている方法的な見地は，私のみるところでは，どうしてもマルクスの学説史的展開の内部にふかいつながりをもっている。それは，結局においては，労働価値説の理解とその前進的展開，適用の問題にもかかわるものであって，これの理解如何によってマルクス経済学の科学的性格にたいする見方は大きく変わるであろう。

本稿は，マルクスの学説史に依拠しながら，かれのいう「厳密に科学的な経済学史」(「社会民主主義者(ゾチアル・デモクラット)」，1865年1月25日)の構造について考え，さらにひろく経済学史の在り方についても多少の意見を提出することを，目的とする。一般的な経済学史は，がんらい，入門的な知識の提供以上の意味をもつことがむずかしい。経済分析と経済原理との水準向上を目的とした経済学史の在り方が，かならずあるはずである。マルクスの「剰余価値学説史」は，そういう目的をそなえた数少ない典型のひとつではあるが，マルクスじしんはそこに学史の科学性を求めながら，しかもなお問題の一部を未解決のままにのこした。ヒルファディングは，マルクスの「剰余価値学説史」によせて，学史の「科学性」あるいは「科学史」の在り方というものを問題とし，マルクスの学史観とは明らかにちがった新しい角度からの学史論を記し

ている。ここでは，これを手掛りに，マルクスの学史方法論の核心的部分をつかみだしたいとおもう。

マルクスが，過去の学説について語るばあい，語る基準，批判の根拠となっているものが，大略確定されている。これがなければ，先行の学説をみれるはずがないからである。大略確定された理論の諸要素が，従来の諸学説のうちに発見されたり，されなかったりする。発見されても，いちじるしく不完全なものであったり，未成熟のものであったりする。見渡しきれぬほど多数の学説のなかに身を没して，マルクスは，そこに評価すべきものと，排撃すべきものとを，正確に選別するのである。このような立場からの批判をとおして，理論が客観的法則として形成されてくる歴史を，かれはわれわれに示す。「剰余価値学説史」は，このような知的努力の所産とみることができるだろう。

しかしまた，学説研究というものは，多くのばあい理論建設の準備作業を兼ねるものであって，マルクスもその例外ではない。学史を記した時分のかれの理論内容が，ほぼ確立されていたとはいえ，細部の点でなお不明な部分をのこしたとしても，べつだん不思議ではない。まして，

1. 「剰余価値学説史」は，遺稿であって，マルクスの手で自ら出版されたものではないこと。

2. この学史は，「経済学批判」のあと，「資本論」初版のまえ，1861年から63年にかけて綴られた心覚え風の断稿であり，かれの遺著の順序から推して，問題の多くが模索の段階にあったこと。

この二つの事情を考え合せるなら，なおさらのことである。

いうまでもなく，労働力の商品化の認識と，これにもとづく剰余価値の正しい解決の途は，マルクスによってはじめてひらかれた。これは，かれのもっとも得意とするところであって，かれはこれをこの草稿の主たるテーマとした。この方面からは，古典経済学のなかに提供された主要な問題——剰余価値という——の解決者として，マルクスを位置づけることができるだろう。だが，他面において，価値および価格の問題にかんするマルクスの解決

方法には，のちの「資本論」にたいして，マルクス独自のものに反するわるい影響を及ぼすような，いわば古典経済学の残滓がみとめられる。これは，かれが，のちの学者に提供した問題のひとつであり，19世紀後半以降の資本主義のあたらしい発展とともにマルクス経済学の分裂——といってもリカアドオ学派の解体分裂とは大分わけがちがうのだが——をひきおこし，その発展と修正とをまねいた原因の一端をになうものであった。

2

ヒルファディングは，経済理論の進歩を二つの側面からとらえる。すなわち，「思惟相互の適合化」と「思惟の事実への適合化」との，二つの途を辿って，科学的理論は進歩発達をとげてきたとみる。マルクスの「剰余価値学説史」は，二つの道筋を経た経済理論の発展を敍し，「経済学の歴史的敍述」を「科学史」たらしめた唯一の試みであるとみるのである。

この解釈は，ヒルファディングの独特のものであって，「マルクス経済学前史」(Vorgeschichte der Marxschen Okonomie, Neue Zeit. 29, Jahrgang, Bd. II, 1910–11, 30 Jahrgang, Bd. I, 1911–12) の第1節「科学史の記述方法について」にのべられているが，そこには，このほかにも興味をひく若干の説明がある。「剰余価値学説史」の方法的問題を考えるうえで，この論文は逸すべからざる参考材料の一つであるとおもう。

「剰余価値学説史」の主題の範囲については，すでに末永茂喜教授が深い理解を発表した[1]。教授によれば，マルクスの著書は，古典派の学説にたいするマルクスの批判をまとめたものであるが，批判の対象となっているのは，スミスやリカアドオの学説の全体ではない。すくなくとも「資本論」全3巻でとり扱われている問題と範囲を同じくするものではなく，それよりも範囲のせまいものである。だからマルクスの著書は，「資本論」第4巻ではなく，むしろ「剰余価値」にかんする学説史であって，「経済学批判」での「商品分析のための史的考察」，「貨幣の尺度単位についての諸学説」，「流通手段と貨幣についての諸学説」とならぶものである，というのである。私が

ここでマルクスの学史の方法的問題について論じたいと思うのは，むろんこのような「剰余価値学説史」の範囲如何という問題にも関係するところがある。しかしここでは，まず，このマルクスの学史的遺稿の，学史としての性格，「科学史」としての特色に焦点をおいて考えてみたい。

1) 末永茂喜「古典経済学研究」305ページ以下，論文「剰余価値学説史におけるマルクスの意図について」(経済研究，1955年7月，第6巻第3号) 参照。

マルクスの「剰余価値学説史」の学史としての一つの大きな特色は，それが経済理論の論理的発展史だということである。ヒルファディングはこういう。

「経済学の歴史においては，自然科学の歴史と趣きを異にする。すなわち，ここでは科学的見解にたいする反対，いいかえれば厳密ないみでは非科学的意見の主張も，それらが一般に比較的大なる顧慮をはらわれているかぎり，ある一定の政治的立場を背後にもっているというだけで，歴史的にもまた重要——だがむろん純粋な経済理論の発展にとってはそうではない——だからである。……しかしながら，これらの労働価値理論から離れているすべての教説をとりいれるとすれば，「剰余価値学説史」のなかでこんにちわれわれに示されているような論理的発展の映像は，ただちに破壊されてしまうであろう。マルクスがそんなことをしなかったのは，構成上の必要などからではなく，それが事実上経済学の歴史記述の関与するところではなく，純粋な経済学それ自体には無縁な社会学的立場の関与するところであるからにはほかならない。労働価値理論の発展からかけ離れた諸見解は，経済政策的関心性から明らかにされるものであり，したがって，それは科学的公平さと矛盾し，より一層の科学的発展の内面的必然性と矛盾し，それゆえにまた，もっぱらこの内面的必然性だけを示そうとする一叙述の範囲外に脱落するのである。」(ヒルファディング，前掲書。玉野井，石垣訳「マルクス経済学研究」26～27ページ)

「マルクスが，われわれに提示するものは，歴史的=社会学的な意味にお

ける，したがってなかんずく実践的=経済政策的意味における経済理論の歴史ではなくして，本質的に，論理的継起として敍述されるところの，経済理論の内面的発展の闡明である。」(同書訳。27 ページ)

ヒルファディングは，マルクスの学説史を「科学史」の模範的な一敍述であるとして称揚し，その理由としては，要するにこれを，マルクスの敍述した経済学の歴史は，その範囲を「労働価値論」の発展にかぎって，これを離れたものはのぞかれ，もっぱら経済理論の内面的展開のみをとり扱っている点に，もとめる。

元来，経済学説は，多かれ少かれ，経済政策的意見や哲学的背景を背負っており，これらのものと経済理論とは離れがたく結びついている。経済学の歴史では，純粋な経済理論と自称する学説すら，その精神的背景を完全に切断してしまうことはできない。これは，歴史科学としての経済学の宿命であって，自然科学と対蹠的な特色であろう。たとえば，フィジオクラァトたちの哲学は，いわゆる「自然法哲学」であり，その政策的主張は，自由主義的な政治的意見となってあらわれている。古典学派は，自然法の大陸的な分岐としての「功利主義哲学」と自由主義的政策論とを後楯としている。しかし，経済理論の認識とイデオロギーとのあいだには，境界線をひくことができるし，またひかねばならない。科学的認識と政治的理念との区別は，学説をみてゆくばあいの第一の必須の手続きであって，たんにそれは，政治的目的が理論的認識を弁護したり，逆に政治的信仰を理論が合理化するといった傾向をふせぐためだけでなく，むしろ理論を真に政策化するという要請にもとづく。

もともとこの二つのものは，本質的区別があるからこそ，区別が可能になる。この区別の反省は，したがって，経済学が一個の科学として形成・独立化してくるなかで，次第に深められてきたものであった。スミスは，経済学を国富のための学として，政治的に従属させ，その体系 System の内部において経済理論が十分に独立していない。リカアドオになると，分配の法則それじしんの究明に主たる関心がそそがれ，理論的考究の側面がつよく前面

に出る。なるほどリカアドオには，科学の限界についての明示的な説明こそないが，その抽象的な分析態度は，そのゆえに，分析の諸前提そのものの役割を大きく制限する作用をなした。このようなリカアドオ経済学の性格は，「かれの追随者をして経済学の二つの部門の区別，すなわち学 science と，術 art との区別，ドイツ語でいうならば“theoretisch”な経済学と“praktisch”な経済学との区別をつよく力説することを必然ならしめた」(Gunnar Myrdal: Das Politische Element in der Nationalökonomischen Doktrinbildung; aus dem Schwedischen Übersetzt von Gerhard Mackenroth, Berlin, 1923, 山田雄三訳「経済学説と政治的要素」14 ページ)のである。すなわち，抽象理論の意義にたいする極度な偏愛は，理論の限界にたいする認識を，暗黙のうちにふかめることになる。かくして，J. S. ミルは，「学」は「術」から区別すべきであるとし，前者では事実を，後者では指針を取り扱わねばならぬとといた。

「科学は，真理の集成であり，技術は行為のための準則または指針の一体である。科学の言葉は，これは云々である。またこれは云々でない，これは起る。またはこれは起らない，である。技術の言葉は，これは為せ，かれは避けよ，である。科学は一つの現象を認めてその法則を発見しようと努め技術はある目的を立て，これを実現する手段を求める。」(J. S. Mill: Essays on some unsettled Questions of political economy, 1844, 3ed. 1877, p. 124. 末永茂喜訳「ミル経済学試論集」160 ページ)

かようにして，古典の流れのうちにも次第に，科学の境界線設定の試みは，あらわれてきた。古典学派と限らず，重商主義の諸学説から重農主義をへて，古典学派にいたる経済学の発展を，体系としてみるならば，実践的，政策的方策とは独立に資本主義社会の原理的解明の領域が次第に拡充深化されてきたことは，このことを証明するものであろう。このような科学の限界づけの試みは，マルクスの「剰余価値学説史」において，完全なかたちで実現した。マルクスじしんは，科学の範囲，研究領域の設定について，特別にそれだけを論ずるということ(ミルのように)をしていないけれども，両者は区別しうるものであり，また区別しなければならないものであるという，学

説観察の基本態度を持して変らなかった。この点をとらえて，ヒルファディングは，経済学の分野で科学史の敍述を試みた最初のものだと賞賛しているのである。

だが，これまで述べたことについて，考えてみなければならないことが若干ある。それらは，経済学的なものとそれ以外のものを個々の経済学体系において区別することから，直接に生じてくるものである。

第1に，論理的な内面的発展行程のみに光をあてて，その継起的展開だけをみてゆくならば，それは，当然のことながら，諸学説の存立の基礎となっているイデオロギー的なものの性格をいんぺいする。マルクスのイデオロギーが，どのように先行者とちがっていても，その差異は，ここでは消滅する。同じように，リカアドオとマルサスが，階級的立場や政策的立論において対抗的関係にあったというふうなことは，排除され，問題とならない。すなわち，主要なる関心は，マルクスの経済理論の個々の要素や契機，課題が先行の経済学のなかに，いかに芽生え，いかに解決されてきたかという一点に，しぼられてくる。マルクスが，その体系の根本的前提とする唯物史観が，先行の学者のだれともちがう独創のものであり，したがって，経済的諸カテゴリーは歴史的性格のものである。それらは，だから生成，変化，成熟，没落する発展的法則にしたがうものである。また経済学において唯物史観の一般法則が個別的に実証されるものである。これらのマルクスの固有な意見は，どれもみえなくなってしまう。経済学の認識史は，このようなマルクスの特性を不明にする。

「いかにもマルクシズムのこうした特性は，『剰余価値学説史』の論理的な敍述様式においては不分明のままにとどまっている。したがって，マルクスじしんは，その科学を変革する者としてではなく，もっぱらその完成者としてあらわれるにすぎない。」(ヒルファデイング，上掲訳書。31-32 ページ)

第2には，唯物的な方法による学説史は，右の理論史と同列にならぶ経済学史の一形態とすべきではなく，それは理論史のあとに位置ずけるべきである。いいかえれば，経済政策，思想史は理論史をはなれて十分な成果をあ

げることはのぞめない，ということである。けだし，理論の内面的発展行程をたどる学史は，諸経済学体系の本質的関連，学説の内面的進歩の側面のみをえらび出して敍述しようとする。経済事情史や経済思想的環境をみる基準は，これによって設定されるものだからである。唯物的な方法にもとづく学史は，その都度，経済史的発展の各段階に応じて，経済学の理論にたいして提出された課題を明らかにする。そのばあい，本質的な関係，つまり経済学的思考にたいして課題とされるような基本的に重要な関係の選択は，理論の内面的基本線をよりどころとなすべきであろう。経済の歴史的事情をまえにして，何が本質的であり，何が非本質的であるかを，それは示す。もしこの基準がないとすれば，対象はたちまちにして無限の混沌と化し，整頓の方途は失われるであろう。しかも経済学と名のつく学説にしてからが，その数において限りがない。であるから，複雑多様な歴史的現象，みわたしきれぬほどおびただしい経済論とに，整然たる秩序をあたえるものは，論理的な学史であり，この意味で，それは，歴史的，発生的方法による学史解明の前提であり，かかすことのできない「先行作業」でもある。

第3には，思想，政策，イデオロギーの歴史は，それゆえ，目的も役割も，内面的科学史とは，まるっきりちがうものである。前者は，時代の思想的環境，資本主義の発展段階の歴史，経済政策の動機，成果，効能など，多くの事項にわたって，唯物論的に明確な分析をなし，時代の映像をうきぼりにする。論理史は，現象の解明ではなく，経済原理論の拡充深化に資すべきものである。思想史として重要な学説が，理論史として無視されるばあいがしばしばあるように，理論史として逸すべからざる経済学説だからといってそれが，必らずしも思想の歴史的敍述の系列に重要な一項をなすとは限らない。たとえば，ベンザムは，自然法思想のイギリス型として注目すべき学者でありながら，経済学の歴史敍述ではまったく問題とされない。この逆のケースもむろんある。いずれにしても，このような交錯の関係それじたいの存在は，学史としての重要な分析視点をなすものなのである。

第4として，このように科学史としての経済学史は，一般の思想史とは

任務も目標もちがい，判然たる区別を画さねばならぬものであるが，しかしあくまでも理論史は，イデオロギー史の土台であり前提である。経済学は，シュムペーターのいうように，いつの時代にも「衣裳」を身につけてたちあらわれる。(Schumpeter; History of economic analysis, 1954. 東畑精一訳 I. 58 ページ)哲学的，政治的態度をおびない経済学は，学説の世界でいちどもあらわれたことがない。経済学は，多くの側面，異質的な要素からなるひとつの「観念複合体」であって，経済学体系であり，過去にあらわれた諸学説は，いちようにこのようなものであった。「経済学体系」としてのスミスやリカアドオの学説に，その理論的部分と政策思想的部分，哲学的部分をみわけることができると，われわれは考えるのである。しかもそのさい，理論的領域の特色や性格を検討する仕事は，これを基礎にして樹立される結論，方針，判断などをみるばあいの尺度になるであろう。とくにこのことは，理論的特徴と政策的指針とが完全に一致するばあい，部分的にくいちがいをみせながら大体において一致するばあい，二者が相異なるばあいなどに，重要になってくる。リカアドオは，一致するばあいを示し，スミスは第2のばあいを，ケネーは第3例を示しているようにおもう。しかし，「経済学体系」の本質的性格をきめるとなると，やはり理論的方面に重点をおいてきめなければならないものであろう。

3

「剰余価値学説史」のいま一つの特色は，それが剰余価値の理論を主題としたものであり，その方面からみて，マルクスは剰余価値理論の完成者としてあらわれる，ということである。

末永教授はこの見地から学史を展開する[2]。マルクスの学史は，剰余価値をテーマとした学史であり，この主題の範囲をこえないものであって，「資本論」第1巻の「歴史的附録」とみるべきであるという独特の主張をなしている。そして資料的にも，理論内容的にも，そうみなければ，この学史の正しい理解をのぞめないとする。

この意見は，もともと通俗的な解釈に反対して樹てられたものである。通説によると，「歴史的，批判的，附説」である学史は，その分散配置プランの計画が変更され，「資本論」第4巻に集約されたとされるのであるが，マルクス・レーニン主義研究所[3]から出版された同書の「序説」はこの通説を支持し，その資料的裏付けも周倒に行なっている。

この通説をとれば，「剰余価値学説史」の範囲は，「資本論」全3巻のふくむ所要の領域のすべてにおよぶことになるが，これらと多少ニュアンスを異にする意見として，ヒルファディングをあげることができるようにおもう。

かれは，「労働価値論」発展の基本線にそってマルクスが，剰余価値の解明を完成したとみるのであるが，そのさいかれは，理論進化のプロセスをとらえる。すなわち，経済理論の進歩は二つの筋道をへておこなわれる。1は，「思想相互の適合化」であり，これは，「科学的思惟一般の普遍的条件であり，科学的思惟一般が可能であるための論理的前提」である。(ヒルファディング，前掲訳書。21ページ)

経済学の原理を構成する諸々の概念，要素，契機は，ひとつの発展的な論理のなかに総合され，総括されなければならない。あたえられた論理的条件においてそれらのものは論理的一貫性を要求されるのであって，科学としての経済学は，この要請にこたえて進歩してきたのであった。「個々の思想家の論理的な力はもちろん相異なるものであるから，ある思想家は他の思想家が見おとした論理的不一致を観念複合体のなかになお発見するかもしれない。そしてそれゆえに，一科学体系の内部で純粋に論理的な作業をなすことによって，つまり個々の思惟要素をより厳密に体系化し適合化することによって，より高い一致への進歩が展開されるのである[4]。」

第2の道とは，「思惟の事実への適合化」であって，たとえば，利潤の均等化によって成立する価格の価値からの背離をリカアドオが価値法則の例外として述べたようなばあいに，あらわれるところのものである。すなわち，資本の有機的構成の差異がいまだ比較的に重要性をもたなかった時代には，そのようにのべても，さほどの誤りとはいえなかったものが，時代がすすん

で固定資本の比重が増すにつれ，その理論的基礎が失われるような結果になる。経済的な発展が新らたなる事実を生み，思惟の事実への適化を要求するようになる。ヒルファディングは，ここでもマルクスは，利潤率の均等化と価値法則の妥当性との論理的調和をはかり，経済学的思惟の一貫性を証明したというのである。そして，「科学的進歩にとって決定的なものは，新しい事実であるという洞察も生じてくる。この新しい事実は，自然科学の領域にとっては技術が提起するところのとりわけ新しい課題なのであるが，それと同様に社会科学にとっても，経済的発展がつくりだす新しい社会的事実が新しい課題となるのである。思惟相互の適合化は，たんに科学的進歩の条件であるにすぎないが，しかし思惟の事実への適合化は進歩そのものである。」(同訳書。23～24ページ)と結論づけている。

ヒルファディングが，科学的進歩の条件と進歩そのものとを分けて考え，マルクスの学史論を，この角度から理解したのは，興味ふかい。この解釈を促した理由として，私は二つのものをあげることができるとおもう。かれの「経済学前史」という論文は，総体的にいってヘーゲルの「哲学史」から相当につよく影響をうけながら記されたものであること[5]，および，かれじしんが「金融資本論」の序言にも明記されているように，資本主義の発展とともに絶えず新しい事実，革新的な現象が発生するにつれ，経済学の課題もつねにあらたに発生し，そこに理論のあらたなる進展が図られるという見地をいだいていたこと，この２つである。

資本主義は，巨大な力で発展し，たえずあらたなる生産力に相応したあらたな事実を生みだしてゆく。が，この生産様式が商品生産を基礎とし，根本とするということは，不変であって，資本主義制度の根本法則は，そのかぎりでかわりようがない。経済理論は，この根本法則を認識し，事実の発生，発展とともに，その論理的解明を対応反映させざるをえないのである。それゆえに，ペティにおける労働価値法則の最初の定式化から，「資本論」第３巻にいたるまでには，一つの論理的経過をもつ—発展が生ずる。すなわち，単純な商品生産から資本家的世界市場へと，現実が発展するに応じて，経済理

論も進化発展する。だから，ヒルファディングは，「金融資本論」を，この意味の経済学の系列のなかへ組み入れたのである。

以上粗密当を得ないが，末永教授が，「剰余価値学説史」の主題領域の限界を剰余価値に限り，その完成性を主張されるのにたいし，ヒルファディングは，その範囲を「労働価値論」一般に解放しており，したがって，「資本論」全3巻にぞくする問題範囲のすべてを含むとみており，しかもさらに，通説とちがって，資本主義の発展が課するあらたなる問題設定とその解決とが，のこらず追加補足されるはずだと，いわんとするもののごとくである。そうすると，「資本論」もまた，新しい歴史的発展に応じた理論を追加継続させてゆかねばならぬということになるが，事実，ヒルファディングは，そのように考えたのであった。が，しかし，これら三様の意見に多少のずれはあっても，剰余価値論が，マルクスの学史的遺稿において完全なかたちに理論化されたとみる点では，えらぶところがないのである。私も，それはそのようにいってよいとおもう。

2) 末永教授の「経済学史」(経済全書第2巻，三笠書房) はこの立場からの理論史であるようにおもわれる。

3) 1865年7月31日，エンゲルスあての手紙，1866年10月13日，クーゲルマンあての手紙，1867年4月30日，ジークフリート・マイヤアあての手紙，などにマルクスのその趣意がうかがわれる。

4) ヒルファデイングは，この実例として，古典経済学者たちのいわゆる「労働の価値」という概念をめぐる説明方法をあげる。スミスは労働量による価値規定と「労働の価値」すなわち貨銀による価値規定の二元のあいだをさまよったが，後者の説明は，価値による価値の規定となり，循環論におちいるから，論理的に誤りである。リカァドオは，二者の誤れる同一視を，しりぞけたが，同時に「労働の価値」という範疇を存続させながら，労働者のうけとる価値は，つくりだす価値よりも小さい，さもなければ剰余価値は生じようがないという論理的不一致をのこした。マルクスが「労働の価値」のかわりに労働力の価値を規定することによって，この論理上の適合化をはかった。(同訳書。22ページを参照)

5) かれは，ヘーゲル，カント，フイヒテ，シエリングなどの観念論を，イデーの自己展開としての内面的な哲学史に総括し，観念的思惟体系の完成者としてあらわれる点に，マルクスを擬している。またヘーゲルの哲学史が，思弁的論理の系列と哲学的諸

体系の系列とを厳密に平行させる恣意的な構成におわったとして批判を加えながら，大いにこれに影響をうけているようにおもわれる。

4

経済学史を「科学史」にまで高めるためには，経済理論と経済政策，一般的には科学と思想との関連についての方法的反省が必要であり，その反省は古典派の流れのうちに漸次たちあらわれ，マルクスにいたって確立された。「剰余価値学説史」というマルクスの遺著は，この方法的反省にうらづけられている。同時にまた，古典派の課題であった剰余価値というカテゴリーのいろいろな性質規定を完成したものである。以上は，このようなことを示してきたのであった。以下では，このような解釈にともなう諸問題をいくつか考えてみることにしたい。

1. シュムペーターは「経済分析の歴史」でこんなことをいっている。

「マルクスは，つねにリカアドオから出発し，これを批判する方途によってその仕事を果したのである。リカアドオの批判こそ，かれの純粋理論的研究におけるかれの方法であった。ここでは，ただ3つの目立った例証のみをあげよう。

〈1〉 マルクスは大体においてリカアドオの価値理論をうけいれ，これをリカアドオ流の議論で擁護したが，リカアドオ流の価値が，価格と比例するとは期待されえないのを認めて，価値と価格との関係について異なる理論をつくりだそうと努めた点。

〈2〉 マルクスは，リカアドオの先導にしたがって，リカアドオと同じく剰余価値の問題にぶつかったが，リカアドオの解決が実際は真の解決でないのを認めて，リカアドオの設計から進んで自分の搾取理論を展開した点。

〈3〉 「(省略する――筆者)」(上掲訳書 3。822ページ)

この文言には，不正確な表現が少からずみとめられるが（とくにマルクス経済学の形成という観点からみるときそれが判然とする），しかし，ここで挙示されている2点は，たしかにマルクスにとっての課題であった。このシ

ュムペーターの論点を，ヒルファディング流儀でいいなおすと，こうなる。マルクスは，剰余価値の理論を搾取理論として完成し且つ思惟相互の適合化をはかる一方，価値と価格との関連の問題は，これを思惟の事実へ適合化の過程として解決した。すなわち，商品生産の段階で一般的に認知される労働価値の法則を出発点としつつ，マルクスは，資本主義生産の下での剰余価値の真相を理論的に解明し，さらに固定資本の増加という新規の現象および有機的構成の差異という新事実の発生から生じた問題も，独特の媒介項を設定することによって解決したのであると。私は，このように整理しうる意見について，その半分は正しく，あとの半分は必らずしも的を射てないとおもう。経済学史の進歩には，連続の面と非連続の面とが交叉して存するのであって，この一方の連続の側面でマルクスは，剰余価値の問題を解決したが，それは，古典経済学では問題の所在を了知しながら未熟な解答にとどまっていたものを完全な解答に仕上げたのであった。マルクスは，だから，集大成の仕事を果したのであり，完成者としての貢献があったのである。しかしながら，価値と価格との関連の問題についても，同じようなことをいえるかどうか。

たしかにマルクスは，この課題について，リカアドオとは異なる解決方法を「つくり出そうと努めた」のであった。そしてそれは，マルクスの天才的な独創性によって成功したのであったし，まさにその点にこそ，かれの経済学が従来の一切の学説の水準をぬくところの革命性が存するのであった。だが，部分的には多くの問題を残すことにもなった。もともと，古典派に共通する実体的価値の把握は，価値と価格との論理的解明には適合性をもたないのであって，この前提をくつがえすことなしに価格現象の説明をなすのは，マルクス経済学の無用の誤解をまねくおそれが多い。価値というものは，いわば可能態として概念されねばならぬものであり，それゆえに労働量あるいは労働時間により直接的に規定されえない。したがって価値と価格とが一致するとかしないとかいう表現も，ややもすれば量的な概念とされやすいから，慎重にはさけるべきものである。すぐれて流通的な概念である価値を，古典派の学者たちは，生産過程的に解し，価値の形態性よりもその実体的規定に

目を向けていたのであった。マルクスの創見は，むしろ価値の形態であったはずなのに，価格あるいは生産価格の説明において，古典派の等価交換法則もしくは等労働量交換の考え方がつよく尾をひいているのである。

2. 末永教授のいうところに誤りがないとするなら，価値，価格論が，まだこの学史的草稿において未完成であるのは，不思議ではない。剰余価値の説明を完成するために，必要なかぎり，その問題に関説されるにすぎないからである。しかし，資料的には，さきにあげたマルクス・レーニン研究所版の「剰余価値学説史」の序言にも精説されているとおり，マルクスが，この労作をすすめているうちに，当初の対象範囲が広められ，最初のプランの枠をはるかにこえることも，しばしばあったであろうことは，容易に想像される[1]。

マルクスは，「剰余価値学説史」のリカアドオ学派の解体の結びのところで，こういっている。

「リカアドオ学派の全敍述は，この学派が次の2点に帰着することを示している。

1. 剰余価値の法則に照応するところの，資本と労働とのあいだの交換についての無理解。
2. 一般的利潤の形成。剰余価値と利潤との同一視。価値と生産価格との関係についての無理解。(マルクス・エンゲルス全集，改造社版=285ページ)

これによってみてもわかるように，たとい前進的展開の主要線から逸脱しても，生産価格の問題は，マルクスにとっては主要課題の一つとして意識されていたことは，事実であろう。私は，この第1の項は，マルクスの手で完璧な解答があたえられ，第2の項はマルクス以後の経済学の課題となったのだと考えるのである。

3. 「資本論」第1篇の商品論と貨幣論について，「理論的・歴史的方法」ということがいわれる。このばあい理論的というのは，商品を端初とする商品の内在的矛盾の論理的展開をいい，歴史的というのは，いろいろに解しうる。具体的な資本主義の発達史としての原始的蓄積過程も考えられようし，

単純な商品生産社会も仮想できようし，また学説史もある意味で考えうる。

マルクスは，「資本論」の理論的部分にたいして，歴史的部分ということを手紙でかいている。(1863年8月15日，エンゲルスあての手紙) これは，もちろん「歴史的・文献的部分」のことであって，「剰余価値学説史」の意であって，実在の，もしくは抽象的想定としての歴史過程とはちがう。しかし，ヒルファディングは，資本主義の発展を，単純商品生産から資本主義生産への発達史としてとらえている。

「じっさい現実は，単純な商品生産から資本家的世界市場への発展として以外には把握されえないものである。」(前掲訳書。25ページ)

科学は現実の概念的把握であるから，学説もまた，これと並行して，ごく一般的，単純な労働価値説の理解から (たとえばペティ)，マルクスの「資本論」にいたるまでの論理的系列をなしてあらわれる。このばあい，2者は照応し，平行線上に対応する，学説の内在的発展と具体的歴史的進化とは一致する。このようにヒルファディングは考えている。まえにも指摘したように，これではあまりにヘーゲル的である。またマルクスが「綱要」でのべた理論的・歴史的方法というものは，いわば経済学の原理の展開についてそれを云々しているのであって，学説的な展開とは無関係であるようにおもう。

4. 「剰余価値にかんする諸理論」というマルクスの遺稿は，その当初のプランでは，たしかに「資本の生産過程」につづく「歴史的・批判的・文献」であって，剰余価値を主題としたものであることは疑いないが，しかしその意図が，この草稿の終章まで一貫しているかどうかの判定は，むずかしい。草稿の進行中に，これ以外のカテゴリーにたいする理論的積極的解明が，混入していることも，否めないところであろう。いずれにしても，重要なことは，この学史が理論的・内面的発展を一筋の基本線としていることであり，剰余価値の解明において間然するところがなかったということである。しかもさらに，価格の問題においてマルクス独自の課題を提出したということである。この点に，従来の学史の水準をぬく科学的見地があると，私は考えるのである。

カール・カウツキー版の「学説史」は，従来，マルクス原文の修正，歪曲が少くないとして，とかくの批判をうけているが，マルクス・レーニン研究所版の「序言」は，これに激しい調子でこういっている。

「マルクスの内容目録の完全な無視，手稿資料の勝手な間違った配列，マルクスによって批判された諸見解の階級的性格を回避する客観主義的な表題，マルクスの経済学説と全ブルジョア経済学とのあいだの根本的対立のもみ消し，カウツキーがだんだん離れ去った革命的マルクス主義の重要な主導的命題をふくむいくつかの節の省略。」(同書訳。17 ページ)

カウツキーが，手稿資料の配列を変更して「年代主義」(13 ページ)をとったのは，常識的な考えに出たものであろう。しかし，カウツキーの編輯の労に思いおよんで，多大の賛辞をおしまなかったヒルファディングすら，「マルクスの経済学にかんする草稿が，その原形のままで完全な姿で開かれたらいいという願いは，抑制しようもない」といい，「マルクスの思考行程をその完全な形で所有するということは重要なことだ」といっている。「年代主義」は，一般的な経済学史やイデオロギーを中心とした思想史には，欠かせない条件であるけれども，「科学史」にとっては，そうではない。科学的理論史では，理論成立の年代が前後をかえることに頓着しない。(マルクスは事実，ケネーをスミスのあとで論じている) カウツキーは，この点で不用意であったというほかはない。だが，「学説の階級性」や「マルクス経済学の革命性」を消し去るような，「配列」，「表題付け」，「省略」というようなことは，カウツキーを難ずる声として好適であるかどうか。むしろ「客観的」な理論的敍述の連続性，したがって課題にたいする完全な応答というところに，マルクスの学史の科学性があったのだし，「マルクス経済学の革命性」ということは，そのイデオロギーじたいに求めるべきものではなく，過去の学説とはまったく異質な，したがってその限りで非連続な理論的な問題の提出の仕方についていわるべきであろう。

1) マルクスが 1858～62 年の間に考えていた経済学プランでは，この学説史は，「資本一般」の第 1 項目の「資本の生産過程」にふくまれ，その末頃に配されている。(前述

の科学版，訳2ページ)のちに変更して，第4巻として，まとめて出版する計画を，マルクスはもった。変更したのは，出版計画であって，学説史をかいた時点からみるとずっとあとのことである。

シュムペーターも，この点についてのべている。「あらゆる事柄，かれの読書の間においてかれのぶっかったあらゆる論議にたいして，かれはたえず取組んだが，その情熱的な熱意は，たえず彼をその前進の主要線から逸脱させるほどのものであった。もし私が，マルクス解釈学を書くようになるならば，右の事実は恐らく私の中心のテーマとなるであろう。彼の「剰余価値諸理論」を精読するなら何びともこの事実を充分に確信するに至るであろう。」(前掲訳。3. 813ページ)

5

等しい労働量をふくむ生産物どうしが交換されるという命題じたいは，マルクス独自のものではなく，古典学者たちがいちように採用した前提であった。マルクスは，この命題をひきつぎながら，これを真に科学的な把握にまで高めたかどうか，剰余価値論の完成とおなじ意味でそれをいうことができないのではなかろうか。ここに，古典学派からの継承の面からみた経済学の完成者としてのマルクスからはなれた，いまひとつのマルクスの側面がある。そして，これがマルクス以後の経済学の課題[1]である。この課題は，たんに論理内部において適合化をはかるという仕事にとどまらず，それ以上に方法論的な考究を必要とした。価値論は，いよいよその科学性を，明確にせねばならぬ段階に達したのである。

富とはなにか，それはいかに獲得されるか，それはいかに分配されるか，これがブルジョア経済学の問題であった。マルクスにいたってはじめて富がとるところの形態が問題とされたことは，いうまでもない。マルクスは，ブルジョア経済学の自明の前提であったものを問題としたのであって，富の「技術的考察」ではなくして「経済学的考察」に道をひらくことにより，マルクス的方法の革命的性格を証明したのである。したがって，価値の価格への転化の問題は，古典派とはまったく異なった問題提出の仕方から出たものであり，経済学の主題は，生産力あるいは生産過程の分析よりも，それがとると

ころの社会的形態，生産関係の諸形態の分析におかれることになった。ところが，経済学的考察がこのように生産関係の諸形態に向けられることになると，当然のことながら，経済学は，同じ経済学という分野において二つの探求方法を採用するほかはなくなるのである。

「生産関係を探究する問題には，二様の回答をあたえることができる。そしてこの回答の仕方によって，経済史と理論経済学とが区別される。前者は，生産関係の成立を問題とする。すなわちそれは，一定の自然的状態のもとで，生産力の一定の程度において，いかにして一定の生産関係が成立してきたか，生産関係は生産関係で，いかに生産力に反作用をおよぼし，より以上に発展し転形するか，ということを明らかにするであろう。」(ヒルファディング，前掲書訳。116ページ)

よく知られているように，古代，中世，あるいは社会主義社会のような社会体制には，このような経済学内部の二様の領域を区別する必要は生じない。生産関係が透明であるならば，生産力の一定の水準がいかなる生産関係を成立させるかという唯物論的・発生的説明以外になお，科学的把握を必要とせぬからである。上のヒルファディングの言は，正しい。だが，そのあとで，「理論経済学は経済史から分離された。後者の領域はいっさいの社会構成をふくむが，理論経済学一般にとっての問題は，一定の歴史的社会組織においてはじめて成立するものである。」(同121ページ)となしているのは，どうであろうか。

ヒルファディングが，理論の領域と歴史分析の領域とを経済学編別構成の内部で区別し分離したのは正しいが，2者の関連性を十分に意識していないうらみがある。資本主義を対象とする経済学の内部での2者の関係は，あくまで原理論を基礎とし，経済史的分析がこれによって方向ずけをあたえられるものであろう。この点，学史の分野で内面的理論史が発生的・歴史的方法による学史の前提であった関係と，同じことである。

ヒルファディングによると，資本主義のたえざる発展が新しい事実，新規な現象を生みだす都度，原理的なものが修正，補足，追加されてゆき，そ

の発展行程が一つの論理的な展開を示し，そこに経済学史が成立するもののごとくであるが，このばあい，資本主義の発展ということをもう一歩たちいってみる必要がある。それは，ただ直線的な発展ではなく，やはり生成，確立，成熟，死滅という社会有機体の歴史的過程として，つまりいくつかの段階を画しつつ進展するものとして，とらえうるであろう。新らしい事実，新規な現象も，このような段階的特殊性をおびてあらわれるだろう。それだからまた，原理的なものが，たんに追加継続されてゆくのではなくて，そこに一定の限度，境界線がひかれるべきではないか，という問題を考えてみなければならぬ。

経済学史は，ヒルファディングのいうような，資本主義の発展に応じてあらわれる一切の学説を，一筋の理論によってつらぬくことを目的とした，観念史ではない。経済原理の限度，範囲を明らかにし，理論史の領域を明らかにするような，方法的な視野をもたねばならないとおもう。すなわち，それは，経済的歴史分析を分離させた経済原理論が，さらに資本主義発展の各段階における特殊性の分析とも一線を劃しつつ，この社会体制の一般的運動法則を解明するという性格をもってくるという次第を，明らかにしなければならない。そしてこの仕事は，とくにマルクス以後の経済学の発展にそって行なわれうるのであって，経済学史に負わされた重要な課題の一つは，このような意味で原理を中心とした経済学全体の立体的編別構造の明確化にあるようにおもう。

1) この課題の意味を，論理的に証明しなければならない。さしあたりは，鈴木鴻一郎編「利潤論研究」を参照。